

永遠の一瞬 (仮題)

— Time Stands Still —

2014.7

日本初演
Japan Premiere

小劇場

●前売開始：2014年5月10日(土)

作： ドナルド・マーグリーズ

翻訳：常田景子

演出：宮田慶子

企画意図

欧米の良質な同時代作品の中から、日本未上演のものを選びすぐって紹介していこうという意図のもと、2012年に宮田慶子演出で上演した『負傷者16人』に続いて、00年『ディナー・ウィズ・フレンズ』でピューリッツァー賞を受賞したドナルド・マーグリーズの『永遠の一瞬』(仮題)を取り上げます。

この作品は09年2月にロサンゼルスでグッフェン・プレイハウスで初演されました。10年にはニューヨークのマンハッタン・シアター・クラブで上演、ニューヨーク・タイムズなどで賞賛され、作品賞と主演女優賞の2部門でトニー賞にノミネートされています。

イラク戦争時、戦場で取材をする女性ジャーナリストを中心に、彼女を取り巻く人々のそれぞれの人生の変化を描いた本作は、近年も各地で上演を重ねています。日本での上演は初めてとなります。

作品

舞台はブルックリン。イラク戦争の取材中、路上爆弾で負傷したフォト・ジャーナリストのサラ。事故当時ニューヨークにいたボーイフレンドでレポーターのジェイムズは、いたたまれない思いで迎えに行き、二人でアパートに帰ってくる。

彼らの家に、写真編集者の友達リチャードが、彼よりかなり若く新しいガールフレンドのイベント・プランナー、マンディーを伴い見舞いに訪れる。……ギブスをしていた足、包帯で吊っていた片腕、爆弾の破片による顔の傷あとが癒えるころ、サラとジェイムズの関係にも変化が訪れる。

翻訳家からのメッセージ

常田景子

ニューヨークで『ディナー・ウィズ・フレンズ』を見て以来、いつかドナルド・マーグリーズの戯曲を訳したいと思っていました。『ディナー・ウィズ・フレンズ』は小田島恒志さん訳、宮田慶子さん演出で、日本でも上演されました。今回ついにマーグリーズの戯曲を翻訳することができて、大変うれしく存じます。この戯曲は、紛争地帯を報道するジャーナリズムが大きなテーマになっています。そういう報道に対しては、「命をかけて事実を世界に知らせている」という称賛の声とともに、「何をわざわざ、そんな危険なところに行くんだ?」という批判もあります。四人の登場人物はそれぞれ、自分は人生に何を求めているのかを自らに問いかけます。誰が正しいとか、間違っているとかいうことはなく、人は誰も自分が本当に求めるものを追いかけていくほかに、生きる道はないのだということを深く感じさせてくれる戯曲です。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

今なお、世界のいろいろな地域で、根深い問題を抱え、その解決点が見つからないまま、爆撃やテロという悲劇が繰り返されています。報道でそのことを知りながらも私達は、「何をしたら良いのか」「何ができるのか」「どうしたらこの争いをおさめることができるのか」と考え続け、「誰ひとりとして、その答えを持ち得ないのではないか……」——そんな絶望的な想いとらわれたりもします。

世界の構造の中で、今や、紛争の要因は、単に当事者同志の争いでなく、強大な国々の利権や政治がそれらを後押ししていることも、自明の事として理解し、まずはこうして日々安全に暮らしている我々の生活が、実は彼等とつながり、時にはその犠牲の上に成り立っていることすら認識しています。

けれど、その自覚を頭の隅に追いやって、目の前の生活に甘んじている……。

2009年に発表されたこの作品は、まさに、そんな現代に生きる私達の“胸の闇”を突いてきます。

身近な視点から、大きな世界をとらえようとした、「現代を生きる人間の立ち位置」を等身大で問いかけてくる舞台になれば、と願っています。

永遠の一瞬 (仮題) — Time Stands Still —

ドナルド・マーグリーズ

Donald Margulies

1954年生まれ。アメリカの劇作家。イェール大学教授。82年『ルナ・パーク』で劇作家としてのニューヨーク・デビューを飾る。99年11月にオフ・ブロードウェイで開幕した『ディナー・ウィズ・フレンズ』がロングランとなり、2000年のピューリッツァー賞を受賞、のちに映画化もされている。日本で上演された作品に『短編集』『ディナー・ウィズ・フレンズ』『ブルックリン・ボーイ』がある。その他に『The Loman Family Picnic』『The Model Apartment』『Sight Unseen』などがある。



©photo by Ethan Hill



常田景子

Tsuneda Keiko

東京大学文学部心理学科卒。在学中、劇団夢の遊眠社に入団。文学座附属演劇研究所20期。木山事務所、NOISEなどで俳優として活動しながら翻訳を始め、バルコ劇場制作部を経て、現在は演劇脚本を中心に翻訳に携わる。初上演作品は1993年『滅びかけた人類、その愛と本質とは…』、2001年第8回湯浅芳子賞、翻訳・脚色部門受賞。近年の主な作品に『エンロン』『ピアフ』『太陽に灼かれて』『グレンギャリー・グレン・ロス』『6週間のダンスレッスン』『シカゴ』『デモクラシー』など。新国立劇場では『やけたトタン屋根の上の猫』『負傷者16人』など。主な翻訳書に『ヴェードゥーの神々』『戯曲の読み方』『現代戯曲の設計』『リディキュラス!』など。

宮田慶子

Miyata Keiko

P2を参照。

